

「連濁」 概論

An Introduction to Japanese Rendaku

テイモシー・J・バンス

公立小松大学

「連濁^{れんたく}」という名称は、あくまでも専門用語であり、言語学に携わらない日本語の母語話者が使わない単語である。しかし、この馴染みのない単語が何を指すかという話になると、母語話者だけでなく、日本語の学習者もよく知っている現象である。

連濁は主に複合語にかかわる現象である。自立語として清音（五十音図のカサタハ行の音）で始まる語が複合語の後部要素になる場合、その清音の代わりに濁音（清音に対応するガザダバ行の音）が現れる事例が多い。例えば、「玉」たまは清音のたで始まるが、「目玉」め+だまのだまはたに対応する濁音のたで始まる。要するに、め+だまのたは連濁の一例である。仮名表記の面から見ると、連濁は複合語の後部要素の最初の字に濁点を付けることである。

連濁は例外なく生起するわけではない。例えば、「水玉」みず+たまの場合は、後部要素のたは清音のままである。100年以上の研究によって、包括的な規則がないことが明らかになった。一方では、様々な傾向も発見されてきた。本稿の目的はいくつかの傾向を簡単に紹介することである。

(1) 複合語と凍結句

「髪の毛」かみ+の+け（名詞+属格助詞+名詞）は連濁しない（×かみ+の+げ）。「髪の毛」は、厳密に言うと、凍結句であり、単語同然に扱われている慣用句であるが、自発的に作られた句と同様に、凍結句の最後の成分は普段は連濁しない。それにもかかわらず、「天の川」あま+の+がわは説明できない判例になっている。

(2) ライマンの法則

複合語の後部要素の単独形に濁音があれば、その要素は連濁しないという制約がある。例えば、「鳥肌」とり+はだのはだに濁音のたが含まれているので、連濁しない（×とり+ばだ）。国学者の本居宣長は18世紀の後半に完了した『古事記伝』でこの制約に簡単に触れたが、最古の詳しい説明は、アメリカ人の鉦山学者、ライマン（Benjamin Smith Lyman）が1894年に出版した論文にあるので、ライマンの法則という名称が定着している。ライマンは、1873年から1880年まで

御雇外国人として日本に滞在した。ライマンの法則は、強い制限ではあるが、例外が全くないわけではない。数少ない判例の1つは「縄なばしご」なわ+ばしごである。

(3) 外来語後部要素

外来語要素は、ほとんど連濁しないが、江戸時代以前に借用された外来語の中には、例外もある。例えば、「合羽」カッパはポルトガル語の「capa」に基づいたものであるが、「雨合羽」あま+ガッパの場合は連濁する。しかし、この「合羽」は、400年ぐらい前に日本語に借用され、漢字も当てられたので、外来語として認識されていないであろう。最近借用され、カタカナで表記されている外来語は、一切連濁しないとんでも過言ではない。例えば、「心理テスト」が×しんり+デストに、「生ハム」が×なま+バムになる可能性はない。

(4) 漢語後部要素

漢語要素も、外来語と同様にほぼ連濁しないとよく言われているが、実際には、確率は大分違う。言うまでもなく、漢語も外国語（中国語）から借用されたものであるが、いわゆる外来語と違う振る舞いをする。複合語になると、典型的な漢語要素は、「放送」ほうそうのような二字熟語であり、連濁しないのが大多数を占めている。例えば、「車内放送」しゃない+ほうそうのような複合語の場合は、「放送」は一切連濁しない。しかしながら、「不足」ふそく、「会社」かいしゃ、「鉄砲」てっぽうのような、連濁する漢語二字熟語要素もあり、珍しいとは言えない。「運動不足」うんどう+ふそく、「株式会社」かぶしき+がいしゃ、「水鉄砲」みず+でっぽう等のごく普通の複合語である。

(5) 畳語

畳語じょうごとは、同一要素の繰り返しからなる単語を言い、複合語の一種と見做してもいいであろう。その要素が和語の場合、ライマンの法則が関わらない限り、連濁しやすい。「国々」くに+ぐには典型的な一例である。一方では、重なった要素がオノマトペ（擬音語・擬態語）であれば、連濁は起こらない。「けらけら」や「げらげら」のような例はいくらでもあるが、×けら+げらのようなオノマトペはあり得ない。

(6) 免疫

「枷」かせという和語は、どういうわけか、連濁に免疫がある。「風」かぜのような和語と違い、ライマンの法則は当てはまらない。「秋風」あき+かぜが×あき+がぜにならないことはライマンの法則に起因するが、「枷」の単独形には濁音はない。また、連濁したりしなかったりする「髪」かみのような和語とも違い、「枷」は一切連濁しない。「髪」の場合は、「黒髪」くろ+かみのような例もあれば、「前髪」まえ+がみのような例もあるが、「枷」の場合は、「足枷」あし+かせや

「首枷」くび+かせのような例はあるが、○+がせと発音する複合語はない。連濁に理由のない免疫がある要素は、「枷」のほかにもいくつかある。例えば、「粕」かす（「酒粕」さけ+かす）も「潮」しお（「高潮」たか+しお）も「紐」ひも（「靴紐」くつ+ひも）も一切連濁しない。

(7) 揺れ

「空咳」と書く典型的な複合語の場合は、非連濁形の中から+せきでも連濁形の中から+ぜきでもいい。このような発音の揺れは決して珍しいとは言えないが、普通の人は単語の発音が揺れるべきではないと思っている。しかしながら、方言と関係なく、連濁の有無が揺れている単語もあることは否定できない。この事実は、2016年に出版された『NHK 日本語発音アクセント新辞典』の編集者が認めている。「空咳」の場合は、見出し語は「カラセキ」になっているが、「カラゼキ」は「放送で使うもう一つの発音」としてその項目に現れている。

(8) 意味的分岐

「奥深い」は、「空咳」と同様に発音が単に不安定であると断言できないかもしれない。なぜなら、おく+ふかいとおく+ぶかいを使い分けている人もいるらしい。全くこのような直感がない人も多いが、使い分けている人は、非連濁形のおく+ふかいは「奥が深い、奥まっている」という文字通りの意味を持つのに対し、連濁形のおく+ぶかいは「意味が深い、深遠でわかりにくい」という比喩的な意味を持つと主張する。発音の揺れが生じると、このような意味的分岐に繋がる可能性も生じるものの、連濁の有無で意味が明確に違う実例は極めて稀である。「大手の鉄道」の「大手」おお+てと「大手を振る」の「大手」おお+では挙げられるが、この場合はアクセントも違う話者が多い（^高お^低て、^高お^高で）。

(9) 類推の仕組み

「白船」は、実在語ではないが、言語学者の大野和敏が行なった心理言語学実験では刺激語として現れた。被験者に漢字表記の「白船」と一緒に、非連濁形のしろ+ふねと連濁形のしろ+ぶねを平仮名表記で見せ、よりいいと思うものを選んでもらった。しろ+ふねとしろ+ぶね以外の選択肢はなかった。「船」は、複合語の後部要素になると、必ず連濁するわけではないが、「○+船」の実在複合語の大多数は連濁する。或る和英中辞典（近藤・高野 2001）に収録された見出し語に絞ると、合計 21 語の 17 語が連濁する。つまり、「親船」おや+ぶねは典型的、「引き船」ひき+ぶねは例外的であり、「○+船」の連濁率は 81%（17/21）である。しかし、実験の参加者は、この傾向を踏まえて、単に「白+船」の連濁形（しろ+ぶね）を選ぶわけではない。「白船」を見ると、「黒船」という実在語が思い浮かぶ可能性が高く、「黒船」くろ+ぶねが連濁しないことは全体的な傾向より重要である。新しい複合語を作り出すときも、連濁するかしないかの判断は、その場でたまたま思い浮かぶ実在語によると言わざるを得ない。言い換えれば、類推の結果は完

全に予測できるものではない。

本稿は、2020年6月20日から7月19日までに行われた全5回分の公開講座「世界を知る：なぜ異文化理解なのか」のうち、7月4日の第2回講演「アメリカ人から見た日本・日本語・日本人」を、講演者の手によりまとめたものである。

参考文献

- Ohno, Kazutoshi (2000) The Lexical Nature of Rendaku in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics 9*, ed. by Mineharu Nakayama and Charles J. Quinn, Jr., 151-164. Stanford: CSLI.
- Vance, Timothy J. (2015) Rendaku. *The Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, ed. by Haruo Kubozono, 397-441. Berlin: de Gruyter Mouton.
- NHK 放送文化研究所 (編) (2016) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』 東京：NHK 出版.
- 近藤いね子・高野フミ (編) (2001) 『小学館プログレッシブ和英中辞典』 (第3版) 東京：小学館.
- ティモシー・J・バンス・金子恵美子・渡邊靖史 (2017) 「序説」ティモシー・J・バンス・金子恵美子・渡邊靖史 (編) 『連濁の研究—国立国語研究所プロジェクト論文選集』 1-23. 東京：開拓社.